

31. 骨シンチグラフィー時に描出される腎イメージについて

——その後の症例のまとめ

柳沢 宗利 町田 豊平 三木 誠
大石 幸彦 木戸 晃 東 陽一郎
近藤 直弥 (慈恵医大・泌)
川上 憲司 勝山 直文 (同・放)

全身骨シンチグラフィー時に描出される腎イメージについて、再検討し報告した。

対象は、泌尿器科185例、200イメージと他科症例 140例、200イメージである。

読影にあたって、骨イメージはもとより、同時に描出される腎イメージについて、腎の形態、RI uptake の均一性、対称性について検討した。なお腎部 activity の判定に、正常骨部への集積、正常大腿部の background を基準とした。

腎イメージの描出率は 396/400 イメージ、99%で、正常腎イメージが 282/400 (70%)、異常腎イメージが

118/400 (30%)、泌尿器科例 98/400 (25%)、他科例 20/400 (5%) であった。左右対称の異常腎イメージは 19/400 (5%)、左右非対称腎イメージは 95/400 (24%) で、両腎の描出がみられなかったもの 4/400 (1%) であった。左右対称異常腎イメージの内容は、腫瘍浸潤による尿流障害を示す uptake の上昇と全身骨転移に由来する uptake の低下であった。また広汎な全身骨転移を有する前立腺癌 2 例と慢性腎不全 2 例で両腎の描出がみられなかった。

非対称あるいは異常腎イメージと読影し、排泄性尿路撮影 (I.V.P.) で腎病変の有無を確認し得た80症例について、読影所見の一致、不一致を検討した。一致した症例は 62例 (78%)、不一致の症例は 18例 (22%) であった。不一致の症例は、I.V.P. 所見が正常で全身骨転移のため腎イメージが淡いかあるいは消失した13例と腎イメージが非対称で片腎のイメージは正常と思われた例で、I.V.P. 所見では軽度の水腎症を認めた 5 例であった。

異常腎イメージを呈した代表例をあげ、骨シンチグラフィー時に描出される腎イメージから腎の形態ならびに機能に関する情報を読みとる必要性について報告した。